

## 関係人口等に関する第 1 回会議等の主な意見

※会議後に事務局あてに連絡があった内容を含む

### (1) 関係人口について

(主な意見)

- ・ 関係人口というのは、そもそも地域を発見する喜びを見つけた人だと考える。人に出会えることによって自分が誰かと作用していることを喜びと感じているのが、関係人口の初歩的段階。
- ・ 関係人口には、移住、定住という選択肢も少なからずあるが、一番重要なことは、ファンやサポーターでは終わらないということ。東京ではできないけれども、自分が見つけたその地域で、その地域の課題を解決してみたいとか、その地域の人たちと何か盛り上がりをつくりたいという意味では、プレーヤーになりたいという願望を持っているところまでは関係人口だと考える。
- ・ 関係人口について曖昧さが非常に残ったまま議論されているので、狭める必要はないと思うが、大枠はこの検討会等で定義づけられたらいいと思う。
- ・ 関係人口とは、どういう社会をつくっていくためにやっていく活動なのかということをしっかりしておかないと、恐らく両者（地域と関係人口）の認識の違いから、お互い不幸になる可能性がある。だからこそ、お互いにとって一番いい形の関係人口などの交流の仕方はいかなるという両方の視点が必要。
- ・ 今の地域で本気で生きている人たちと、外から知らなかったけれども関わって、だんだん移住に近づいてくるような人との間があるような気がしている。高校を卒業すると半分以上が地域から出ていき、大学生、専門学校生、社会人等になっているが、外にいながら、やはり地域に関わりたいと思うものの、関わっていない、関わりしろが見えないということが言われる。全く知らない人も関係人口ですばらしいが、その間のどんどん出ていっている若い人たちをどうネットワークして、いろいろな形で外からでも関わってもらうようなケースも重要。
- ・ 都市の無関係人口のかかわりの段階を上げていくというプロセスだけでは確かでない。関係人口の多様性の中でその議論が必要。

## (2) 関係人口が地域と関わる際の留意点について

(主な意見)

- ・ どのように地域と接していったらいいかということも含めて、関係人口になるためのレッスンのようなフィルタリング的なものがあるとよいかもしれない。
- ・ インターンに入ってきた人などが上から目線で地域に大きな負荷をかけるような状況があり、それを防ぐためにも、地域の方々とごちゃ混ぜになるような場が何らかの形で物的に必要。
- ・ 地方で生き残っている人たちは本気で自分の力で生きている。自分たちでしっかり生きている人たちと本当に会ってみて厳しさみたいなものがわかって、それの中で意識したときに、都会に帰ってからの意識が変わって移住した人もいる。地方創生のあり方、やり方の中に、再度、日本人の本気で自分の力で生きるということをも日本中に浸透させるための一つの手段として、都会と地方との関係人口など、国の土台をつくっていくような作業も重要ではないか。

## (3) 関係人口の受入体制について

(主な意見)

- ・ 関係人口はむやみやたらに増えない。関係人口を奇異な目で見ず、迎え入れる人たちがその地域にいると関係人口は爆発的に増える。例えば大野市。若い人たちが中心で大きなプロジェクトを、「食」を起点としてやっているまちだが、東京の若者たちがどんどんここに遊びに来て、関係人口になって、福井の新聞の特集記事になるまでになった。
- ・ 地元の農家の関係人口を迎え入れる若者たちも増えている。農業関係人口を増やしたい、林業関係人口を増やしたい、漁業関係人口を増やしたい、第1次産業の関係人口を増やしたい若者たちが、大学生たちを巻き込んで地域づくりをする地域も農山村では見受けられるようになった。
- ・ 関係人口のいわば受け皿としての「ふるさと住民」の制度化が考えられる。ふるさとと納税から頻繁な訪問へ、地域居住、そして移住と、いわゆる「関わりの階段」があるとするならば、一般的な運用は、実はふるさとと納税をしてもらったものの、無関係人口にもう一度押し返してしまっている。単なる商品を送って、そこで関係が切れてしまっている。そうではなく、階段を一步ずつ上がるような、「関係人口論的運用」が必要。
- ・ 受け皿の整備について、ふるさと住民の人数を増やすというよりも、むしろ目的は関係性の持続化が重要。
- ・ 昨今、二地域のさらに先の考え方をもち、三拠点ぐらいの拠点を持ちたいと目を輝かせている10代や20代の若者も出てきている。この人たちがその地域に有用な接点を持っていく流れがつかれるのであれば、彼らのモチベーションを閉じ込めなくてもいいのかなと思っている。ただ、余りにも現実とみんなが多拠点で暮らしたいということのギャップがまだまだ大きくその点が課題。

#### (4) つながりサポートや関係案内所などについて

(主な意見)

- ・ 関係人口だけではなく、移住なども含めてであるが、つながりをサポートするものを全国レベル、地域レベルで進めていくようなコーディネーターの育成が大きな課題。
- ・ 多様なプレイヤーの交錯、これが「にぎやかな過疎」ではないかと思う。そして、「にぎやかな過疎」は人口減だけれども、地域がわいわいがやがやしている。人が人を呼ぶ。仕事の仕事をつくる。そして、多様な人々のごちゃまぜ。このごちゃまぜの場が必ず地域の中では用意されている。例えば居酒屋であったり、あるいは公民館であったり、シェアハウスであったり、そんな場があって、それぞれが実は都市農村共生社会の形成、拠点となっている。つまり、これは農山村のみではない、多くの地域のあるべき姿、地方創生のあるべき姿がここにあるのではないか。そんなニュアンスを持っている。
- ・ 観光案内所ではなく、人と人との関係を案内できる場所「関係案内所」が地域にあるのかということが重要。それはゲストハウスでもいいし、ラーメン屋さんでもいいと思うが、そういったものがあるだけで、そこに来る人たちの見える化が図られていると思う。
- ・ 水辺とか、その場所にあるバーとか、本当に小さなものに紐づいて関係人口が増えている場合が多い。もしくは組織。例えば、三島市にあるNPOのみしまびとや田辺の未来塾、新富町のこゆ財団など、もともと地域にいる人たちが外に向けて発信をしていった結果、関係人口が増えていったということがある。10人、20人規模くらいのところには人が人を呼んで広がっていくような組織的な形態が最近の主流だと思う。
- ・ 関係人口が増えているところには必ず中心となっている場所がある。場所はやはり大事だと思う。地域留学も場所だと思う。その場所があるから人が集まっているのではないか。

#### (5) 多様な関わり方について

(主な意見)

- ・ 地域留学について、都道府県立の高校も全国募集を実施しているのは200校以上に広がってきている。潜在的なニーズは非常に大きいと感じているが、一方で、まだまだ認知度が不足しており、地方に行くことに対する不安感も高い。しかも、3年間というところでの期間のハードルなどもある。地域側も、ぜひそういった子供たちを受け入れていきたいという声が非常に強く出てきているが、寮や下宿先など、受け入れ環境が整っていない。海外留学に関してはさまざまな支援制度が日本では充実しているが、地域に行く留学、地方への留学というのは一切ないため、検討していく必要があるのではないか。
- ・ 高知県の津野町と「関係人口の育成講座」を実施。これは津野町外から若者がやってきて、関係人口になるという既存の手法にもう一ひねり加えて、津野町内の若者もその講座に入って、庁内外の若者がちょうどより糸のように強靱な形で

域づくりをするという仕組みをつくった。外からやってくる関係人口と中からその地域を盛り上げたい、いわゆる活動人口がより糸のようになっていったほうがいいのではないかと思って進めている。

- ・ 人材・組織の育成にもつながるが、和歌山県の田辺市は、たなべ創造未来塾という地元の人材育成の組織が、東京で関係人口をふやす施策を打ち出している。「たなコトアカデミー」といって、田辺に行ったことのない 20 代の若者たちが、青山の国連大学の前で田辺市の食材を売ることになった。そのときに助けてくれているのが地元の未来塾の若い人たち。田辺のことを知らない若者のサポートを、田辺のことが大好きな地元の人が、東京でやる流れができた。東京の若い人たちが、田辺に行ったことがないのに田辺市のことを大事に考えてくれている。

## (6) 政策的課題等について

(主な意見)

- ・ 国レベルでは関係人口の量的・質的把握が重要。もちろんそのためには定義が必要だが、関係人口をしっかりと量的に把握することも必要。
- ・ 関係人口を踏まえた新たな地方財政の仕組みなども、関係人口と交付税をリンクするようなことも必要になるのかもしれない。
- ・ 関わる場づくり、支援が重要であるが、特に学生などから出てくるのは、宿泊費や交通費。学生の場合には、特に農家に泊まらせてもらうなどできるが、交通費は課題。介護割引があるならば、関係人口割引があってもよいのではないか。
- ・ 関わりの段階のステップアップ事業も必要。つながりサポート支援をさらに実施していき、関わり価値のさらなる磨き上げとして、現場ではおもしろい人、おもしろい場所、おもしろい場面をつくる必要がある。
- ・ 外部人材、外部組織として関係人口、大学、高校が動くけれども、一方では、内発的な地域の受け皿、地域のコミュニティが重要で、この両者がシステム化することが重要。